

思

考

の

隅

景

が、フレックス・タイム（95導入）とは逆行した硬直した時間管理を余儀なくされる傾向を強めているのも、日本社会の「後進性」と見做されよう。

欧米では「先進国」でも列車の時間割が頻繁に狂うのは有名な話だが、例えばイタリアはボローニャに一年滞在した四方田犬彦氏は、成田空港に着くなり、送迎バスがたった30秒遅れたことをアナウンスで詫げる日本社会のイライラ症候群に直撃されて、自分は何とんとんでもない国に戻ってきてしまったのだろう、という慚愧の念に包まれた、という。それはこの超多忙な映画評論家にとって、日本での「奴隷生活」再開を暗示する出来事だった。

豊かな時間とは何なのか。セイコーがクウォーツを発明して、それまで何世紀もの機械時計から別れを告げ、シチズンがエコ・ドライブを開発して無限機関を実現した技術立国、日本（角山栄『時間革命』新書館 1998）。時間の効率化で世界のトップを行くという自負を得ながら、その日本は、効率主義の自己目的化の悪夢のなかで、何のための効率化？という根本命題を忘れ、目標を見失って迷走している。総理府統計局の「国民生活に関する世論調査」（1995）によれば、家族との団欒や知人・友人と過ごす余裕は、今後激減するだろうとの意識が支配的だ。時間の効率化が、結局は社会の韌帯を解体し、人間関係を希薄化させ、自業自得の自己疎外を促進させる。この過程で、日本は人類史的な寸法で前代未聞の実験に突入している。そうした日本での「時間奴隷」からの解放は、つかの間の海外旅行による代替体験、それも予定どおり物事が進行しないことへの観光客のフラストレーションとしてしか発散（？）されない。

鎌倉の神奈川県立美術館初代館長の土方定一氏は、自分は非常勤講師だから、といって非常事態でもなければ慶応で講義をしなかった。そんな昔日の美談を、西暦とイスラーム暦とコプト歴とが並列して共存する、ラマダーン（断食月）下のカイロで、ふと思い出した。

連載
『モモ』の行方
管理された時間の軌から日本社会を救う道はあるか

石井研堂の『時計の巻』（1903）にこんな一節がある。
「甚だ時間を重んぜず、勿体ない月日を、のらくらの間に暮らす者多く、その弊害は、特に田舎の人に多いです。汽車の出発時間より二時間も早く停車場にかけつけ、欠伸を仕続けて居る者などもあるが、なんと、のんきなことでありませんか」。これに続いて著者は「渋沢栄一翁」を持ちだし、時間を厳守することの功德を説いてみせる。こうした「時は金なり」の思想が、やがて二十年代には生活改善同盟の運動に引継がれることは、常識に属するだろう。文部省主催の「時」展覧会（1920）では、開催主旨として「本邦人の時に関する思想を一変し、時間尊重定時励行の美風を要請して今少しく緊張した規律ある生活をさせる様にした」と見える。裏を返せば、当時の日本人たちは、まだ時間に関してルーズであったことになる。実際、明治期の欧米人の日本滞在記を見ると、日本人のpunctuality観念欠如が、頻繁に指摘されている。

だが、さらに裏を返せば、ここには『のんきとうさん』、『のらくろ』という、大正から戦前昭和期の茶の間に風靡した、効率一点張りへの反動が、すでに予言されているとも言えるだろう。芝居に現を抜かした水木しげるの父親が「のんきとうさん」を地で行ったなら、その息子は、戦時下に出世した『のらくろ』とは違って、軍隊に取られても、その本来の志（？）を貫いた。

ここで持ち上がるのは、はたしていつから日本人は時間を守るようになったのか、という素朴な疑問だ。だが次なる問題は、日本における時間厳守が、とかく規律遵守を自己目的とした、いわば儀礼へと偏向し、「時は金なり」というスマイルズやフランクリン経由の功利主義の能率志向からは逸脱した理由だろう。ドイツの労働時間比較調査などから見れば、日本の時間遵守はとかく形式主義で内実が伴わない、上司の顔色を伺い、部下や同僚の嫉妬を買わないためのヨコナラビの彌縫策だと批判される。「行改」のあおりで時間給の臨時職員への依存度を高めている国立のお役所

稲賀繁美
国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学助教